

# 愛の戦棍

## 永遠の薔薇園

オルトヴィーンが去ってから数週間。姉さんは、毎日のように泣いていた。泣きながら、もらった薔薇を大事に大事に育てていた。薔薇は数週間経っても萎れることもなく、凜とした姿で綺麗に咲いたままだった。

「……この町を離れようと思うの。」

ある日姉さんがそんなことを言った。

「どうして？」

「オルトヴィーンさんからもらったお金……あるでしょ？ あれで、引越しができるし……この町にいるの、辛くなっちゃった。」

真つ赤に泣きはらした目で笑う姉さんが痛々しくて、俺は、姉さんがそれでいいなら、俺もいいよ、と答えることしかできなかった。

新しく引越した町は、広い港町。その隅にある小さな家で、俺たちは暮らし始めた。引越し荷物はほとんどない。オルトヴィーンにもらった薔薇と、少ない衣類だけ。……姉さんがいつも夜に着ていたドレスは持つてこなかった。俺は、それがとても嬉しかった。姉さんはもう夜に「花」を売らないんだ。

「結構綺麗な家ねー」

「そうだね」

家は安かった割には広くて、綺麗で、居心地が良さそうだった。前のボロ屋とは全然違う。

「……あ、そうだ。」

姉さんは言って、薔薇をもつて家の外へ飛び出した。そして庭に、その薔薇を植える。

「……それ、意味あるの？」

「わかんない！ でも、……この薔薇を植えていたら、またいつかオルトヴィーンさんに会えるような気がして。」

そう言う姉さんは、もう泣いていなかった。町を離れたことで、いろいろと吹っ切れたのかもしれない。あるいは、隠すのがうまくなくなってしまったか。涙が枯れた可能性もある。少しだけ、哀しい。

姉さんは、町にある花屋で働き始めた。今までは一人だった花売りも、数人の同い年くらいの女性と一緒に働いていけるのがとても楽しいらしくて、食卓ではいつも職場の話をしてくれた。

「今日ね、アニーったら、花がはいった花瓶をひっくり返しちゃって！」

「え……それ大丈夫なの？」

「大丈夫じゃないわよー 当然、先輩にすつごく怒られてて！」

「そりやそうだろうね……。」

仕事の話をする姉さんは、とても幸せそうだ。こんなに幸せそうなのは、オルトヴィーンと会って彼が去るまでの、あの短い期間以来だろうか。

……あの町を去っても、オルトヴィーンとの日々ばかり思い返してしまう。恐ろしい思いもしたけれど、姉さんをほんの少しでも幸せにしてくれたのは事実なんだ。……今、彼はどこにいるのだろう。何をしているのだろう。ああ、なんで俺、あいつのことばかり考えてるんだらう。姉さんじゃあるまいし、これじゃ恋してるみたいじゃないか。……いやいや、流石にないない。

ある日、外に出てみると、引越してきた初日に植えた薔薇のまわりに、小さな薔薇のつぼみがいくつか咲いていることに気づいた。

「ね、姉さん！」

「どうしたのイヴ？」

「み、見てよ、庭！」

「え？」

慌てて姉さんを呼び寄せる。二人で改めて庭を見ると、やっぱりそこには薔薇のつぼみが生えていて。一体どういうことなんだろう。種なんか当然植えてない。植えたのは枯れることを知らない薔薇の花一輪だけ。……オルトヴィーンの力のせいなのかもしれない。彼は、奪うだけじゃないのかもしれない。たとえ、魔性の……ヴァンピールだったとしても。

「ぼらが……咲いてる……？」

「うん、咲いてるんだ……。」

「……っ」

姉さんの目から、涙がこぼれ落ちた。オルトヴィーンのことを思い出したのかもしれない。感動したのかもしれない。分からないけれど、ただ、姉さんは静か

に泣いていた。俺も、気づいたら泣いていた。涙を見られたくなくて、姉さんをそつと抱き寄せる。そうして二人で暫く泣いていた。何故だか分からないけれど、ずつと泣いていた。

そこを訪れた少年がいた。彼は、病の母のために薔薇を摘んであげた。そして家へ帰って、母の笑顔を見て、喜んだ。

摘まれた薔薇は、数日たつと、また新たに咲き誇る。

数日後、つぼみだった薔薇が開いた。もらった薔薇と同じくらい綺麗で、凜としていて、そこにオルトヴィーンがいるんじゃないかと思えるくらい、彼にひどく似ていた。

この薔薇園に、「彼」が訪れるまで、あと、数日。

「……綺麗な薔薇ね。」

「そうだね、姉さん。」

薔薇を眺めながら、優しい表情で姉さんが言う。愛しそうに、幸せそうに、でも切なそうに。

さらに数日後、またつぼみが新たに生えた。そして数日たつと、薔薇が咲く。そうやって、薔薇はどんどん増えていった。いつの間にか、そこには、枯れることを知らない薔薇園が生まれていた。

「……時を超えた先。」

「ん？」

「この薔薇もさ、オルトヴィーンと一緒に、時を超えた先にいるんだろうね。」

あの日、耳元でささやかれた言葉。

——君たちの幸せのために、僕は時を超えた先へ戻るよ。

あの時は意味がよく分からなかった。でも今、なんとなくわかった。彼らはこの薔薇と同じなんだ。永遠に枯れることを知らない。永遠に美しいまま、そこに在るんだ。……彼はやっぱりただの人間じゃない。だけれども、本当に、優しい人だったんだ。

「きつと、彼はこの薔薇園に訪れるよ。」

「そう……だと良いな。」

姉さんがほほ笑む。オルトヴィーンのことを思い出しているのだろう。あの短い日々は、姉さんにとって本当に幸せなだけの日々だった。姉さんは今も何も知らない。それでいい。それでいいんだ。オルトヴィーンもきつとそれを望んでいた。だから姿を消したんだ。だから俺も、何も言わない。

——それから数百年と時が経って。薔薇園は、今も、咲き誇っている。あの姉弟が暮らした家が朽ち果ててなくなっても、咲き誇っている。